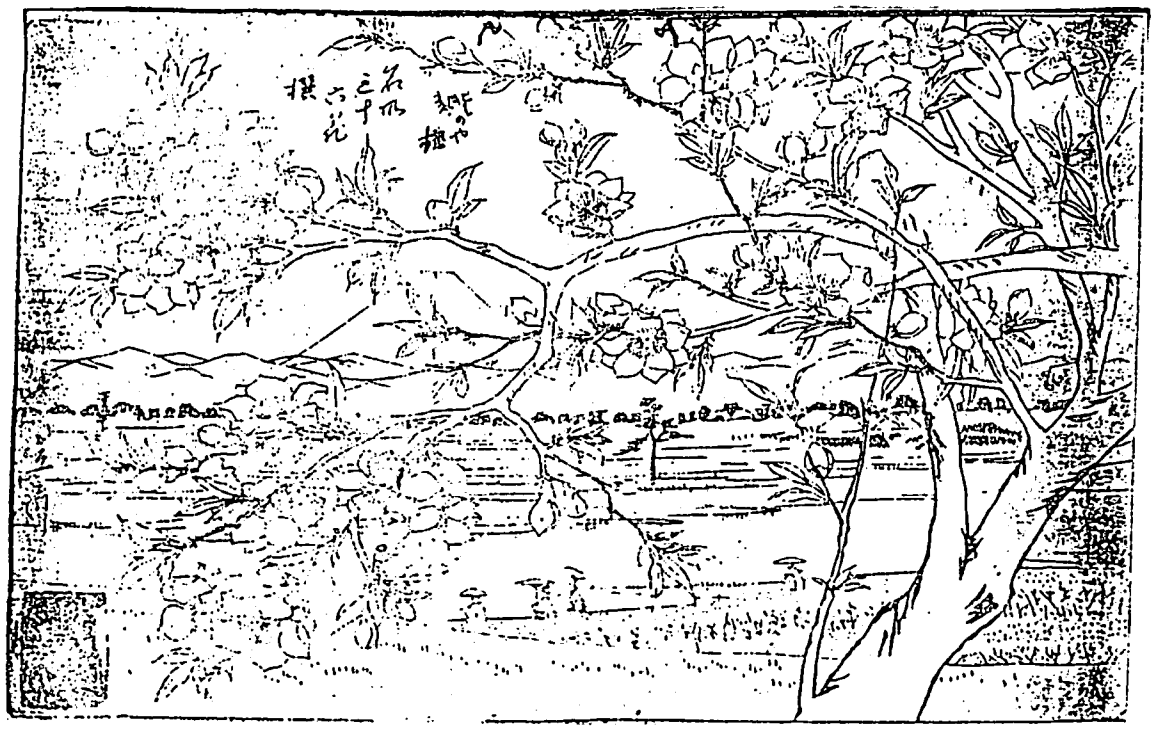
越谷市郷土研究会主催

第３１２回　史跡めぐり

元荒川沿いの石仏と梅林公園



越ケ谷の桃（錦絵の中に「越ケ谷桃　名所三十六花撰」と書かれている）

大林・大房地区周辺は、
江戸時代は『越ケ谷の桃』として有名でした。
明治３５年以降は、『桃』に代わって『梅』の名所となりました。

日　　時　平成１５年３月２日（日）
集　　合　越谷駅東口　午前８：２０
方　　面　市内　元荒川流域（上流）及び越谷梅林公園
コ　ー　ス　越谷駅東口(8:52)→「巻の上」バス停→末田須賀堰→大戸自治会館（宝篋印塔・庚申塔）→大戸の第六天（トイレ）→末田須賀堰→百堂巡礼塔→「野島の地蔵尊」の道しるべ→末田の金剛院（仁王像）→野島地蔵尊（トイレ休憩のみ）→元荒川土手道→砂原の久伊豆神社（砂原公民館・昼食）→元荒川の土手道→〆切橋→野合自治会館（庚申塔）→越谷梅林公園（トイレ）→元荒川の土手道→大房の稲荷神社（二十一仏板碑）→大房の浄光寺（「古梅園記念」の碑）→北越谷駅（解散）
昼　　食　各自持参
参 加 費　１，０００円（見学場所謝礼、交通費、資料代等）
案 内 者　加藤　幸一

元荒川沿いの石仏と梅林公園

末田須賀堰と末田用水・須賀用水

元荒川の水を止めている堰が末田須賀堰である。この堰の末田須賀溜井から末田用水（元荒川の右岸、末田村側）と須賀用水（元荒川の左岸、須賀村側）が出ている。

大戸自治会館（宝蔵院跡）

ア・宝篋印塔（ほうきょういんとう）

本来は宝篋印陀羅尼経を納めるためのものであるが、供養塔や墓塔として建てられる。塔身には、東側には梵字のウン（阿閦[あしゅく]如来）、南側にはタラーク（宝生[ほうしょう]如来）、西側にはキリーク（阿弥陀如来）、北側にはアク（不空成就如来）が刻まれている。

ここに見られる巨大な宝篋印塔は、隅飾り突起がないなど本来の宝篋印塔と違った異形宝篋印塔である。

イ・庚申塔（こうしんとう）

腕が六本もある青面金剛と呼ばれる仏様を本尊とする庚申信仰の庚申塔である。必ずといってよいほど「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿が見られる。

庚申信仰は六十日に一度やってくる干支の庚申の日に庚申講の仲間たちが一堂に会し、徹夜して過ごす行事である。それは、人間の体の中に潜んでいる三尸と言われる三匹の尸虫が、庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。そのために、その日は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝ないのである。このような庚申信仰はかつては全国津々浦々で見られたのである。

第六天神社

「第六天の魔王様」のお使いが、大天狗と烏天狗である。これを描いた向かい天狗の絵馬は、魔よけとして軒先につるしたりした信仰が盛んに行われていた。また、耳の病い除けの錐もある。耳の病気に患っている人が、毎日朝夕に「第六天神」の名を唱えながら耳を三度突く信仰である。

主神は、男神の面足尊（おもたるのみこと）と女神の吾屋惶根尊（あやかしこねのみこと）の二柱である。

江戸時代、日光のお成街道（日光街道）を通って、岩槻の慈恩寺や日光に往来する多くの人々が、わざわざ元荒川沿いを下ってこの第六天神社に立ち寄り参拝したという。そして門前には、鯰の天麩羅、鯰の蒲焼き、鯉料理で有名な川魚の料理屋が数は減ったが、今でも立ち並んでいる。

また、第六天の講中が関東各地にみられ、関東各地からの参拝客で賑わったという。第

六天の信仰が広範囲にみられていたことがわかる。神紋は、天狗の葉団扇である。

仏法でいう「第六天」とは、この天に生まれた者は他の者が作り出した楽しみを自分の楽しみにすることができるという。この天には仏法を邪魔する魔王が住んでいるという。この「第六天の魔王」の魔力で、いろいろな願い事がかなえられるという。

第六天の錐（きり）『神錐』（しんすい）

武蔵第六天神錐は御神慮錐として往昔より耳の病の方々がお借りして朝日朝夕第六天神の御名をとなへ念じつゝ耳をつくこと三度みたまのふゆを蒙り平癒の上は二本にして納める神錐であります。

宮司敬白

寛文年間の百堂巡礼塔（末田）

寛文三年（一六六三）に神社仏閣の百のお堂巡りが完了したのを記念して造立したものである。数にものを言わせて功徳を得ようとする百堂巡りは、観音堂・薬師堂・地蔵堂・大師堂・阿弥陀堂などさまざまなお堂を巡拝したものである。

百堂巡りは、江戸時代初期の主に寛文年間前後に埼玉県東部から千葉県、茨城県にかけて見られた。

野島の地蔵尊の道しるべ（末田）

主尊は座像の地蔵菩薩。野島の地蔵尊まで、ここからあと五丁（約五百メートル）であることを示している道標付き地蔵菩薩像石塔である。文化十年は、西暦一九一三年。

南　のじま　五丁
文化十酉年
（地蔵菩薩座像）　地蔵尊建立
十一月吉日
願主　即浄

末田の金剛院の仁王像

仁王門そばに説明板がある。次のとおりである。

金剛院仁王門及び金剛力士像

金剛院は、奈良長谷寺の新義真言宗豊山派に属し、金龍山妙音寺という。開山は僧宥慶、初め岩槻にあって金剛坊と称したが、寛正年中（一四六〇～一四六六）に当地に移り金剛院と称した。

天正十九年（一五九一）、徳川家康から寺領十石の御朱印を賜り、またかつては常法談

林として多くの僧侶を教化し、武蔵国移転寺十一か寺の一として由緒ある格式を誇っていた。

仁王門は、元禄十年（一六九七）桂昌院（けいしょういん）の寄進と伝え、簡素な造りではあるが、三段に組み込まれた重木（おもき）や屋根の形などに当時の優雅な名残を伝える建築である。屋根瓦の大部分を失っているのは惜しいが、堂々とした風格をもち、中央に心山和尚の筆になる「金龍山」の門額を掲げる。

門の左右に配された阿吽（あうん）形の金剛力士像は、共に江戸時代前期の作と思われ、寄木造り、玉眼嵌入（ぎょくがんかんにゅう）、胸上で着手式とし、体幹部は左右二材を基本とし、各々補材を充てている。仕上げは下地漆の上に布着せを行い彩色されている。

阿形は左手に金剛杵を執り、右手を力いっぱい広げて降ろし、吽形は左手を広げて挙げ、右手は強く握って降ろすという一般の形であるが、胸や腕、背中の筋力の表し方や均整のとれた姿態はこの期のものとしてすぐれた出来栄えを示している。

昭和五十六年五月十二日　市指定文化財となる。

岩槻市教育委員会

浄山寺（野島の地蔵尊）

浄山寺は、天正十九年（一五九一）に天台宗慈福寺から現在の曹洞宗浄山寺に改めた。寺伝によると、この年、徳川家康が来て寺領として三百石を寄進したが、この時の住職は過分であるとして辞退する。そこで家康は懐紙（ふところがみ・鼻紙）を取り出して、高（たか）三石として記し住職に与えた。このため家康から直接もらったとされる寺領高三石の朱印状を「鼻紙朱印状」と呼ばれるようになったという。

また、本尊の地蔵菩薩が僧侶の姿になって本堂を抜け村を出歩いていると、茶の木で片方の目を突き刺して片目になったとの片目地蔵伝説がある。片目になった地蔵尊はお寺の前にある池で目を洗うと、その池に住んでいるすべての魚までが片目になったという。

本尊の地蔵尊は、子授け、安産などに御利益があるとされ、毎年二月二十四日と八月二十四日は地蔵の縁日で、本尊がご開帳され、境内は露店や見世物小屋、芝居小屋などが立ち並び大変賑わったという。また、この日は地元では特別に農業の休息日にされていた。

江戸時代、湯島天神社などの江戸の町への出開帳も盛んであった。江戸での出開帳が最も多かったのは、成田の不動、次に嵯峨の清涼寺、次に中山の法華寺、次に下野国高田山、そして野島の地蔵であるという。野島の地蔵尊は、関東各地にも出開帳されていた。

以上から、野島の地蔵尊の信仰は、江戸のみならず関東各地に広がっていた。

直径六尺（約一八〇センチ）もある全国に希にみる大きさの鍔口（わにぐち・天保十二年、一八四一年に奉納）がある。

越谷梅林公園の梅

説明板には次のように書かれている。

越谷梅林公園の梅

越谷市の大林や大房、袋山などの地区は、くだものの木に適した水はけの良い土地で、桃や梅の栽培が昔から盛んでした。なかでも桃は江戸時代から有名で、「徳川実記」の編さんで名高い成島司直（なるしまもとなお）という人が、「越ケ谷の桃は」、小金井の桜（東京都小金井市）、杉田の梅（神奈川県横浜市）と並ぶ江戸近郊の花見三名所のひとつに数えたほどでした。また、二代目安藤広重「歌川広重」という江戸時代の画家も、富士山を背景にした越谷の桃の風景を錦絵「多色刷り浮世絵で、東（あずま）錦絵ともいう」に残しています。

これらの果樹栽培は、いろいろな事情のため、昭和30年ごろから桃に変わって梅が中心になりました。その後もしばらく盛んに栽培されましたが、東京のベッドタウンとして越谷市内の開発が進むにつれて、果樹の畑は住宅地などにつくりかえられ、現在ではところどころにわずかに見られるだけになっています。

この越谷梅林公園には、それらの梅林が保存され、一面の桃や梅の林であった昔の面影がしのばれます。

平成十年十二月

大房村・大林村周辺の桃から梅への変遷

江戸時代から明治まで

「越ケ谷の桃」（大房村・大林村あたり）として有名

明治末から戦後まで

「越ケ谷古梅園」（大房の浄光寺周辺）が知れ渡る

現在

「越谷梅林公園」（大林）

大房の浄光寺

説明板がある。次のとおりである。

越谷市指定有形文化財　彫刻

銅像　五智如来立像　五躯

昭和六十一年二月二十六日　指定

大日・薬師・阿弥陀・阿閦・釈迦は、五智如来と称され五つの智を授ける仏として、江戸時代庶民信仰の的となった。浄光寺境内にある五智如来立像は、享保三年（一七一八）から、同五年（一七二〇）にかけて奉納された江戸の鋳物師太田駿河守正儀。この五智如来は最近まで、新暦五月八日が縁日でこの日、眼病や安産祈願に信者が群衆したという。なお、青銅によるこの種の仏像は、越谷にその例が少なく貴重な鋳像物といえる。

平成八年　越谷市教育委員会

浄　光　寺

薬師如来の由来

此の薬師様は其の昔、この地方に難病が多く村人達を救うため薬師様を迎えられ今でも五月八日には花祭りを行い特に眼病の仏様として親しまれ参詣の中心となって居ります。当時の薬師堂は大同元年（八〇六）に創建され大変朽ちておりました。そこへ飛騨の宮大工左甚五郎が日光東照宮修理工事のため道行く途中、夕立に会い、雨乞いに立ち寄り、あまりにも朽ち果てたお堂を見かねて一時の恩義として一夜にして建立し、其の足で急ぎ日光に向かったと云う伝説が残っております。慶長二年（一六四九）徳川幕府より薬師堂領五石を承り、徳川初代～十五代までの御朱印を受けた由緒あるお堂でした。其のお堂は宮内庁御猟場の隣り（現在北越谷五丁目　※1）に有り、薬師様をお奉りして有りましたが、お堂の老朽が進み、保存と管理の都合で平成二年九月五日に当寺本堂内へ仮遷座しておりましたが、平成七年六月八日新御堂に安置され、今日に至っております。

薬師如来

京五條大仏師　田村式部　法橋　作

（マ　マ）※2

寛文二拾子寅三月吉日　仏像の底に記録有り

越谷随一の大仏像　高さ　二米五十五（台座含む）

五智如来の由来

薬師堂と同じ堂地内の小高い所に安置され、五つの智恵の霊験あらたかな仏様として昔から今日に至るまで庶民の信仰の的となり信仰祈願なさる方々が遠方からも参詣になられます。平成二年九月五日薬師如来と共に当寺に移され、大日如来を中心に横一列に元通りに並んで居ります。青銅による大仏像は例が少なく指定文化財となって居ります。

釋迦如来　全宇宙を悟りの道には入らしめ給う

阿弥陀如来　無量寿、無量光を以って衆生を浄土極楽に導き給う

大日如来　全人類をあまねく照らし給う
薬師如来　薬瓶を手にして病に応じて薬を与え給う
阿閦如来　堅固不動の誓願を以って衆生済度を給う

浄光寺

☆筆者注

《※1》薬師堂がかってあった場所は、現在の北越谷五－四－四五あたり（新しくできた寺院の宝性寺の場所）である。

《※2》寛文二稔壬寅　三月吉日（西暦一六六二年）か。

これは、中世の紀年銘の配列をまねして書かれている。再調査が必要である。

「越ケ谷古梅園」（明治末から戦後まで・大房の浄光寺周辺）

「越ケ谷古梅園」について、昭和50年3月1日の「広報こしがや」に掲載された「市史編さんだより［155］」（高崎力氏著）より全文を紹介する。「越ケ谷古梅園」に関することが詳細に述べられている。

越谷市北部の古利根川、元荒川の自然堤防帯では、古くから果樹の栽培が盛んであった。元荒川に沿う大林、大房（北越谷三丁目～五丁目）では市街化した今日でもなお梅、桃の栽培が行われている。

梅は古木になると実なりが減少することから新木に植えかえなければならなかった。このため多くの古木が伐採されるので、これらの古木を一箇所に集め観覧に供しようということになった。明治三十五年三月、藤井浦祐氏ら八名が発起人となり、大袋村長ら多数の賛助員によって、大房浄光寺を中心とした越ケ谷古梅園が開園された。園の広さが約一町歩であったが、地続きに農家の梅林が一帯に広がり、あたかも梅の郷といった風情があった。このなかには、株まわり一メートル前後の大木が数本あり、それぞれの樹姿により「天の橋立」「雲龍梅」「日の出梅」などと呼び名がつけられた。園内には休憩所としてのあずまや二棟、緋毛氈を敷いた床机［茶店などで使う広い台］二十脚のほか、宇田川吉蔵氏ら三名の出店（売店、茶店）があり写真ハガキも売られた。

古梅園は東武鉄道武州大沢駅（現在の北越谷駅）に近く、東武鉄道も観光に一役かった。各駅や車内は勿論、市電内にも宣伝ポスターをはり、梅花期である二月十一日から三月二十日までの四十日間は、往復切符を二割引きとした。さらに古梅園に対しては、年間二十円の肥料代を与えた。このためシーズン中の日曜日などは、駅から古梅園までの道には人の行列が続いたという。

大正時代になってから害虫の発生が多く、花芽を食ってしまうので梅花が年々少なくな

る一方、維持管理などの問題もあって、株式設立による古梅園は浄光寺が引き継ぐことになった。その後、梅林は徐々に回復し、昭和十六、十七年には東武鉄道が主催して、都内の俳人、マンガ家、画家、小説家など文化人を招待した園遊会が開かれた。そのとき訪れた高浜虚子は、「寒けれど　あの人むれも　梅見客」と詠んでいる。前田雀郎、岡安迷子、長谷川かな女らのほか、宮内庁御猟場を訪れた皇族方も来園された。

太平洋戦争後の昭和二十六年から開花期に光頭会［光頭とは禿げ頭のこと］が開かれるようになった。別名ハゲ大会といわれるハゲかたのコンクールである。審査によって等級がつけられ賞品もハゲにちなんでヤカン、タコ、鏡、電球、蝿叩きなどであった。昭和二十九年の大会には女優三名を迎えて撮影会も同時に開催された。この時の記録映画は遠くブラジルにおいても上映された。

現在、梅の木は枯れたり、風に倒れたりして古梅園当時を偲ばせる古木は僅か二本になったが、近年多数の若木を植えたので梅花シーズンになると市内外から梅見客も増えて、浄光寺境内は再び賑わいをみせている。

「越ケ谷の桃」（江戸時代から明治まで・大林村周辺）

「越ケ谷の桃」の紹介

文化年間　成島司直（なるしまもとなお）

「看花三記」の中で「越ケ谷の桃」を紹介

江戸近郊の花見三名所として「越ケ谷の桃」、「小金井の桜」

（東京都小金井市）、「杉田の梅」（神奈川県横浜市）をあげている。

また、このあたり（大房や大林）は、

「岡も野もただ紅の雲の中を往来する」ようだとしている。

さらに、このあたりから築比地（現、松伏町）の長良山まで桃林が

絶え間無く続いていて、ここは桃の花の入口であるとしている。

文化年間　津田敬順（釈大浄）

「十法庵遊歴雑記」の中で、見渡す限り桃林と「大林の桃」を紹介

越谷梅園公園で紹介されている「越ケ谷の桃」の浮世絵（錦絵）

二代目安藤（歌川）広重（初代広重の養女の先夫）

表紙に紹介されている「越ケ谷桃　名所三十六花撰」の浮世絵

提供は、足立史談会理事の須賀源蔵氏（足立区伊興三－二三－二七）である。

古書店で手に入れたもので、白黒で描かれているとのことである。

図中には、上部に「越ケ谷桃　名所三十六花撰」と書かれ、

向かって左隅に「□立斎」（落款）と書かれている。

「一立斎」との落款であろう。初代広重の貴重な作品と思われる。

また、越谷にとっても当時の様子を知るための貴重な資料である。

「市史編さんだより253・『越谷の桃林と藤』」（広報こしがや・昭和54年4月1日）

（前略）現在大沢の元荒川にかかる東武鉄道橋下の元荒川堤から、大房（現北越谷）を経て大林境いに至るまでの堤防にかけては、昭和三十一年越谷町の有志によって植樹された桜が見事に育ち、桜の名所になりつつある。

もっともこの辺りは、江戸時代桃の名所としてひろく知られた所である。『徳川実紀』の編さん者で著名な成島司直（文久三年八五歳没）は、江戸近郊花見の名所として、杉田（現横浜市）の梅、小金井（現小金井市）の桜とともに越谷の桃を選び、それぞれの地を訪れ『看花三記』と題した紀行文を著している。司直が越谷を訪れたのは文化十一年（一八一四）二月の末で、現在の大沢橋の手前を左に折れ（県道浦和・越谷線）、しばらく行って「祐之」（神明下・会田七左衛門家の一門金沢祐之カ）という文化人の宅で一休みし、祐之の馳走による小舟に乗って対岸に渡っているが、この辺りは「桃の花ならぬはなし、枝をもじえ陰をならべ、岡も野もただ紅の雲の中を往来する如し」とその見事さに感嘆している。

また、江戸小日向の僧侶津田敬順は、文化元年（一八〇四）と同十四年に越谷を訪れ、このときの紀行を『十方庵遊歴雑記』という著書の中に収めているが、大林の桃林に関しては、この桃林は越ケ谷宿の西方六町（約六五〇メートル）ほど行き、日光街道から左へ一町（一〇九メートル）ほど入った所にある。川筋に沿って南北一五町（約一七〇〇メートル）幅三、四町にわたっては見渡す限りの桃林で、桃の下には麦や野菜が仕付けられている。花の季節にはどれほど見事であろう、といっている。現在でも松林に囲まれた宮内庁埼玉鴨場の北側一帯は、この桃林の名残を留めたような桃園になっており、北越谷駅から大野島に通じるバスの停留場も桃山と名付けられている。

こうして江戸時代文人墨客の注目を集めた越谷の桃は、二代目広重により「武蔵越がや在」との銘で錦絵にも画かれたが、明治期に入っても盛んであったとみられ、明治三年三月、文人成島柳北が古河藩主の招待をうけて日光街道越谷を通ったとき、「この駅尽くる処桃林あり幾万株あるを知らず、都人称するところ越谷桃源とはこれなり」（『常総遊記』）と述べている。さらに明治四十五年三月二十日の『埼玉新報』には、「越ケ谷と藤塚（現春日部市）なる埼玉園芸会社の桃林がソロソロ笑い初むるにより、本月二十四日より来月十四日迄、越ケ谷及び武里の二駅共通の割引切符を発売し、遊覧者の便を図る由なれば、杖を曳くも一興なるべし」と報じており、当時なお越谷の桃は名所の一つになっていた。

（後略）

旧砂原村の石仏

（1）元荒川土手道

1．馬頭観音菩薩像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　砂原・砂原新橋そば元荒川土手道
石塔型式　駒型（南向き・高さは中）
年　号　宝暦三年（一七五三）

［左側面］
宝暦三癸酉天十一月吉日

［正面］
奉供養為如是
（梵字サ）（馬頭観音像）
畜生発菩提心也

［右側面］
越ケ谷領砂原村　坂巻氏

砂原 1．馬頭観音菩薩像

砂原新橋そば元荒川土手道

（4）久伊豆神社

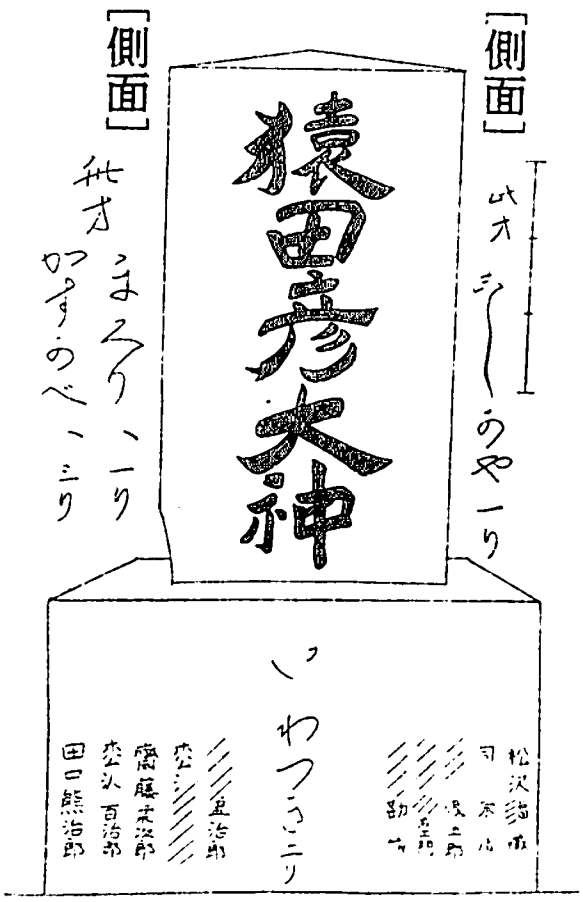
この久伊豆神社は、砂原村の鎮守である。

5．道標付き猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申一番）
所在地　砂原・久伊豆神社入口
石塔型式　頭部山状角柱型（南向き・高さは中）
年　号　明治五年（一八七二）

［左側面］
維時明治五壬申霜月吉辰
君か代や常磐か□ば
かきり□人
□しむの
あらむ限りハ

［台石］
□□□七
桐山喜左エ門
同　恵治
同　幸吉
豊田八三郎
金子熊蔵
同　七五郎
朝倉彦八
同　□治郎
平笙□助

砂原 5．道標付き猿田彦文字庚申塔　久伊豆神社



此方　こしがや一り

〔正面〕

猿田彦大神　いわつき二り

〔右側面〕

此方　まくりへ　一り
　　かすかべへ三り

〔裏面〕

埼玉郡　砂原村

〔台石〕
（表面が破損して、解読不能）

世話人
平□□□
松沢人右ヱ門
平野仁右ヱ門
松沢□□
同□□郎
□□□ヱ門
□□□ヱ門
同　蔵治郎
同　□右ヱ門
松沢□左ヱ門
同　□　蔵
松沢福蔵
同　栄蔵
□（同か）浅五郎
□（同か）□右ヱ門
□□勘蔵
□重治郎
松沢□□
斎藤□（柔か）次郎
松沢□（百か）治郎
田口熊治郎

〔台石〕
平埜清右ヱ門
埜口正蔵
山崎嘉右ヱ門
野口彦右ヱ門
平埜伊十郎
（以下、表面が破損して、解読不能）

※もとは、近くの県道路傍にあった。県道越谷岩槻線から砂原の久伊豆神社に入る道の角地。現在の砂原一四五七－五の宮石家路傍である。

※『越谷市金石資料集』には、明治五年を「明和五年」と誤記されている。「猿田彦神」の解説の中で、市内で一番古い猿田彦の石塔とされているが、誤りである。江戸期の造立ではないが、貴重な石仏なのであえて図入りで紹介した。

6．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二一〇番）
所在地　砂原・久伊豆神社参道
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは中）
年　号　文化二年（一八〇五）

〔左側面〕
文化二乙丑十一月吉祥日

〔台石〕
平野源兵ヱ
野口秀悦
同　重蔵
同　周蔵
同　二重蔵
同　長左ヱ門
同　万平
松沢福蔵
同　茂左ヱ門
同　勘右ヱ門
小林弥左ヱ門
山崎嘉右ヱ門
会田新左ヱ門
斎藤源蔵
桐山喜左ヱ門
平野字兵ヱ
同　吉左ヱ門
同　七兵ヱ
同　多吉
同　六右ヱ門
松沢源蔵
同　治左ヱ門
同　仲右ヱ門
同　源七
豊田清兵ヱ
同　權左ヱ門
田口佐吉
浅倉利八
金子甚五良
同　彦八

〔正面〕
是よりこしかや

〔右側面〕
（日月）（青面金剛像）（二鬼）（三猿）　いはつき
是よりしめきり
砂原村講中

7．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申二八六番）
所在地　砂原・久伊豆神社参道
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは高）
年　号　嘉永元年（一八四八）

［左側面］

岐太神

［台石］

世話人
野口安右ヱ門
田口兵左ヱ門
金子覚右ヱ門
斎藤半蔵
松沢栄蔵
野口豊太良
松沢久右ヱ門
平野宇左ヱ門
会田丈右ヱ門
田口熊次良
同　三六
朝倉彦八
同　梅左ヱ門
豊田八三良
同　文助
桐山寛左ヱ門
山崎加右ヱ門

［正面］

（日月）（青面金剛像）（鬼）（二羽）（三猿）

［右側面］

砂原講中
東組

連名
松沢源右ヱ門
同　万次良
同　三五良
同　音次良
同　勘六
同　久左ヱ門
同　元右ヱ門
平野仁左ヱ門
同　仁助
同　伊兵ヱ
同　久蔵
同　長八
同　平次良
野口秀七
同　彦右ヱ門
同　寅蔵

嘉永元　戊申年十二月吉日

※「岐太神」は「くなどのおおみかみ」と読み、天孫の道案内をした神。つまり、猿田彦大神のことである。

8．天神像（『越谷市金石資料集』天神五番）
所在地　砂原・久伊豆神社境内
石塔型式　祠型（西向き・高さは中）
年　号　天明八年（一七八八）

［左側面］

砂原村

［台石］

［正面］

（天神像）

講中

［右側面］

天明八申年正月吉祥日

※隣に『越谷市金石資料集』の椋名三番の石塔がある。台石を除いた高さは九十五センチ。次の通りである。

◎椋名神社文字石塔（『越谷市金石資料集』椋名三番）
所在地　砂原・久伊豆神社境内
石塔型式　自然石（西向き・高さは）
年　号　明治三十年（一八九七）

［正面］

椋名神社

［裏面］

埴山の　神の功　あるゆへに
五穀豊熟
祈るひと〳〵

明治三十年
五月奉祀

※この近くの砂原一四九四－六の松沢家路傍に高さ六一センチの弁財天文字塔（祠型）と高さ三八センチの稲荷文字塔（角型）がある。

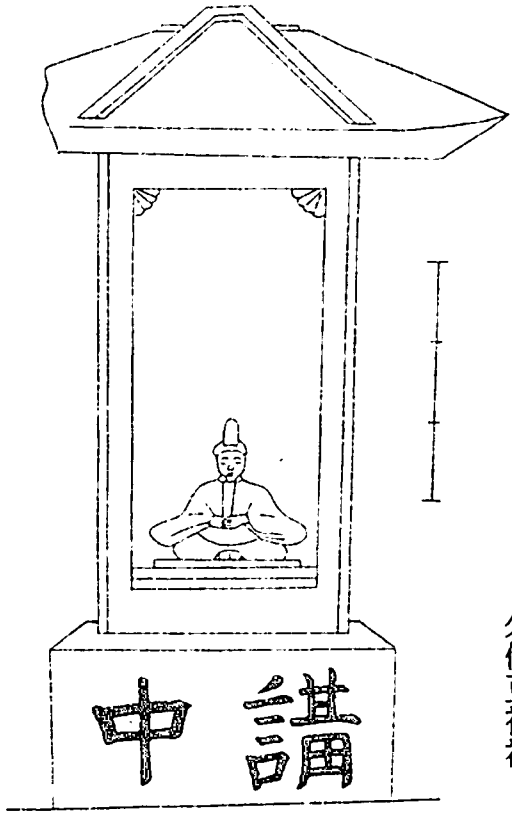
6. 砂原 青面金剛像庚申塔

久伊豆神社

7. 砂原 青面金剛像庚申塔

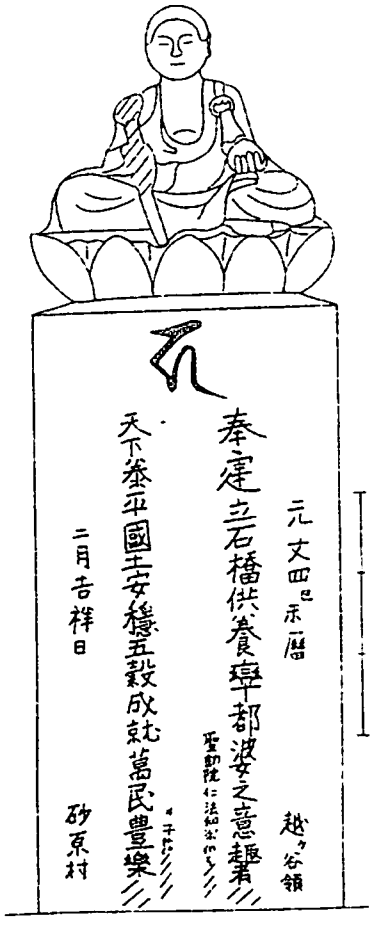
久伊豆神社

8. 砂原 天神像



久伊豆神社

9. 砂原 地蔵像付き石橋供養塔



聖動院跡墓地

（5） 聖動院跡墓地（しょうどういん）

ここは、かつて真言宗寺院の「聖動院」のあったところ。本尊は不動明王である。

9．地蔵像付き石橋供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　砂原・聖動院跡の墓地

石塔型式　丸彫及び角型（東向き・高さは中）

年　号　元文四年（一七三九）

［左側面］

坂巻喜三郎　松沢□　平野善兵衛
小林平七　松沢□右ヱ門　山崎善右ヱ門
小林□　松沢孫左ヱ門　□
野口□兵衛　平野佐平　□
庚申組中　□□右ヱ門　□
田口佐七郎　野口宇平次　同　平四郎
桐山喜左衛門　小林甚内　同　平三郎
松沢平七　平野弥平次　豊田惣兵衛
金子幸七　野口弥七　桐山市平
平野源太郎　金子庄九□　平野平三郎
□

［正面］

元文四己未暦　越ケ谷領

奉建立石橋供養率（卒）都婆之意趣者□

聖動院仁法印□

（地蔵座像）（梵字カ）

□

天下泰平国土安穏五穀成就萬民豊楽□

二月吉祥日　砂原村

［右側面］

木□□兵衛　小曽川村　□村　同　おは女　□
同　半内　□村　花田村　同　お□ん　法□法師　為法閣衛親
同　儀介　末田村　袋山村　同　おふ□　妙心尼
同　勘右ヱ門　福留根村　大竹村　同　おね女　□四郎　八条領□
同　弥右ヱ門　同野嶋村　大道村　同　又二郎　八□　森田太郎□
同　宇右ヱ門　鉤上村　三ノ宮村　同　およめ　同□
同　杉右ヱ門　□新井村　大□村　同　□　同庄五郎
□　後谷村　□　□　同　□　木□勘兵衛　□
同　□村　□　同　同孫右ヱ門
□　□村　釘念佛百人余□
□

※「釘念仏」（釘抜念仏）とは、日光山寂光寺（現在は輪王寺）の五輪塔の絵に四十九の穴が開いているお札を受け取って念仏を四十九万遍唱えること。

寂光寺の札は、覚源上人が地獄で四十九日間、四十九本の釘を打たれて苦しむ様子を見た後に、上人が生き返った時に手に握っていたという四十九本の釘穴のある札を模して作られたもの。念仏を唱えた後でこの札を納めると悪業が消えるという。

10．不動明王像（『越谷市金石資料集』不動三〇番）

所在地　砂原・聖動院跡の墓地

石塔型式　角型（南向き・高さは高）

年　号　不祥

［左側面］

□三月吉日　砂原村中

［正面］

（不動明王像）成田山

※現在は、表面が破損していて刻まれた不動明王像の痕跡すらない。

［右側面］

□□左ヱ門
豊田八五郎
松沢藤　蔵
平野□兵ヱ　越ケ谷宿
石工長兵ヱ

11．「宝篋印陀羅尼」梵字文供養塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　砂原・聖動院跡の墓地

石塔型式　角柱型様特殊型（東向き・高さは超高）

年　号　天明六年（一七八六）

［正面］

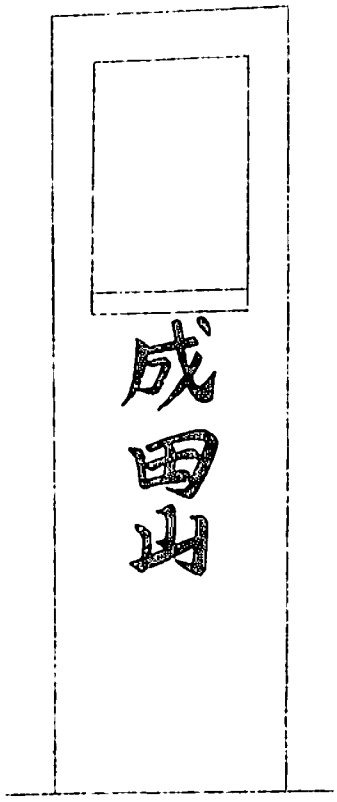
（梵字文）　寛延元戊辰歳八月十五日
（梵字文）　野嶋山浄山寺峰日巌叟識
（梵字ウン）一切如来心秘密前身舎利宝篋印陀羅尼　為代々先祖　野口
（梵字文）　嚇砂原邑野口氏七世之末
（梵字文）　孫宜敦者近代之一偉人也

［台石］

施主　磯内

※寛延元年は一七四八年

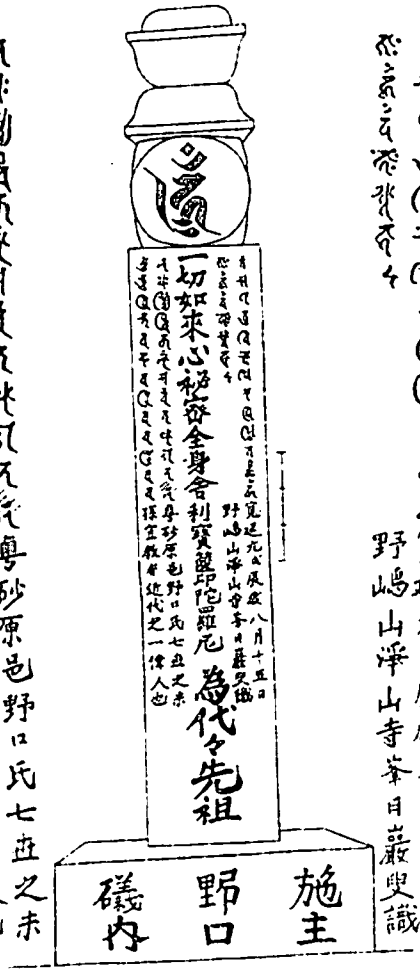
10・砂原 不動明王像



聖動院跡墓地

11・砂原 「宝篋印陀羅尼」梵字文字供養塔

聖動院跡墓地



[右側面]
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字タラーク)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字ヤーク)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
[裏面(上段)]
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
[裏面の続き(下段)]
天明六丙午四月朔日　※一七八六年
積應弘善信士
心安良隠信女
宝暦十一辛巳二月十四日　※一七六一年
尼者既如来心秘密神咒功
徳最勝以何堪比耶矣所冀延享四
因此功勲列名部類有縁無陽岳了
縁三界万霊等頓證仏果菩
提乃至法界群生□円種智歓叟妙
而已矣
宝暦六
[左側面(上段)]
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字アク)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
(梵字文)
[左側面の続き(下段)]
延享四丁卯三月十三日　※一七四七年
陽岳了養信士
歓叟妙喜信女
宝暦六丙子三月十六日　※一七五六年

※梵字文は、ノウ・マク(ㄱㄲ)で始まり、ソワ・カ(ㄱㄲ)で終わっている。「ㄱ」は、梵字文の文末につける記号。

常□捨財修善宿植徳本作
業也故郷称善者而家益富
也可謂勤也矣殊遐回道立村々取添田地
一基之碑塔巍巍然獨露則
直得堅徹三際横徧十方而代々先祖
欲上報四恩十資三有之意
趣顕然馬遐簡是所以能存天明六
其思而尽未来際無汚以無積隠弘
汚故使後人思之後人存思
而追善則亦後人終至千不心安良
忘之嗚呼実多生曠劫勝自宝暦十
縁也況所書写宝篋印陀羅

（9）野合自治会館（馬頭院跡地）

荻島村の一部は、ここ元荒川の左岸にもある。元荒川はかつては袋山村を取り囲むようにして曲流していて、荻島村と袋山村とは陸続きであった。しかし、元荒川が真っすぐに流れるようにと、宝永三年（一七〇六）頃に荻島村北部（野合〔のあい〕）に新川を作り、荻島村の一部が新川によって分断されたのである。荻島村野合は俗に〆切（しめきり）とも呼び、内野合（元荒川右岸）と外野合（左岸）とに分かれた。現在の〆切橋の両岸の地域である。

元荒川左岸の野合の地の野合自治会館に墓地がみられる。これは、明治に作られた「武蔵国郡村誌」に「馬頭院廃跡、外野合（そとのあい）にありしが、明治六年廃寺」と記載されていることから、「馬頭院」と呼ばれる寺院跡の墓地と思われる。

また、現在ここに力石が三基程ある。

17．地蔵菩薩像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　舟型（北東向き・高さは中）
年　号　不詳
〔正面〕
（梵字カ）（　地　蔵　菩　薩　立　像　）
施主　会田弥五左ヱ門
新趣魯奚　　脾中弐十人
□沙門

18．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）
年　号　享和元年（一八〇一）
〔左側面〕
享和元辛酉十一月吉日
〔正面〕
（日月）青面金剛（三猿）

17荻島・地蔵菩薩像

野合自治会館

18荻島・文字庚申塔

野合自治会館

19・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）
年　号　文化八年（一八一一）

〔左側面〕
文化八辛未年四月吉日

〔正面〕
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）

〔台　石〕
栗原有右エ門
同　仁兵衛
会田冨右エ門
石井久蔵
栗原弥三郎
石井弥兵衛
同　金蔵
会田政右エ門
石井音右エ門
竹内喜八

〔右側面〕
天下泰平国土安全

20・青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）
年　号　文政七年（一八二四）

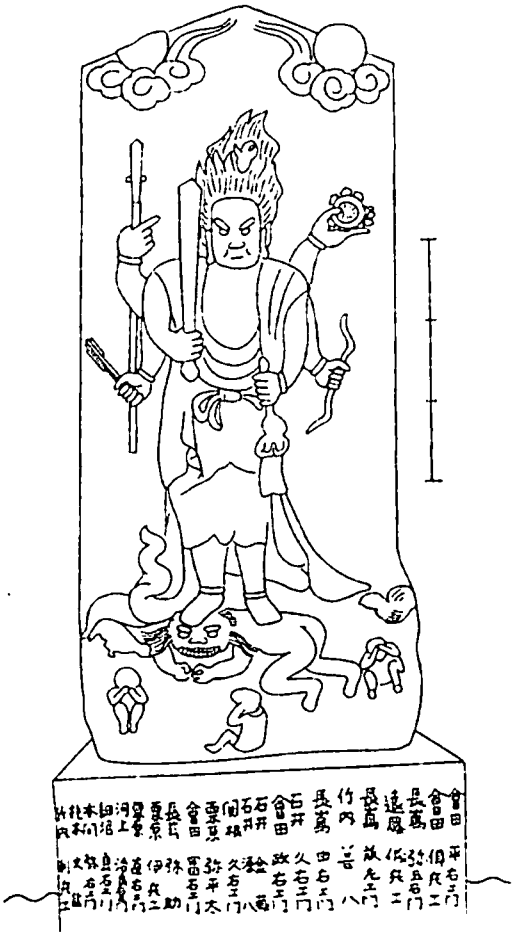
〔左側面〕
文政七甲申年十月吉祥日

〔正面〕
（日月）（青面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）

〔台　石〕
会田平右エ門
会田伝兵エ
長嶋弥五右エ門
遠藤徴兵エ
長嶋藤左エ門
竹内□（善）八
長嶋由右エ門
石井金蔵
石井源八
関根久右エ門
栗原弥平太

19荻島・青面金剛像庚申塔　野合自治会館

20荻島・青面金剛像庚申塔　野合自治会館



会田留右ヱ門
長嶋弥助
栗原伊兵ヱ
栗原直右ヱ門
河上治良右ヱ門
細沼良右ヱ門
本間弥右ヱ門
桃木文蔵
竹内利兵ヱ

21．青面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　角型梯特殊型（北西向き・高さは中）
年　号　享保二年（一七一七）
［左側面］
□体
会田弥五左衛門
（梵字ウン）奉供養庚申待講結衆二世安穏攸
長嶋太郎右衛門
会田与四右衛門
石井三右衛門
［正面］
［台　石］
講
（青　面　金　剛　像）（二鶏）（三猿）　野合組
中
［右側面］
桃木豊右衛門
竹内藤兵衛
石井弥三郎
鈴木庄左衛門
栗原弥兵衛
享保二丁酉天二月吉日

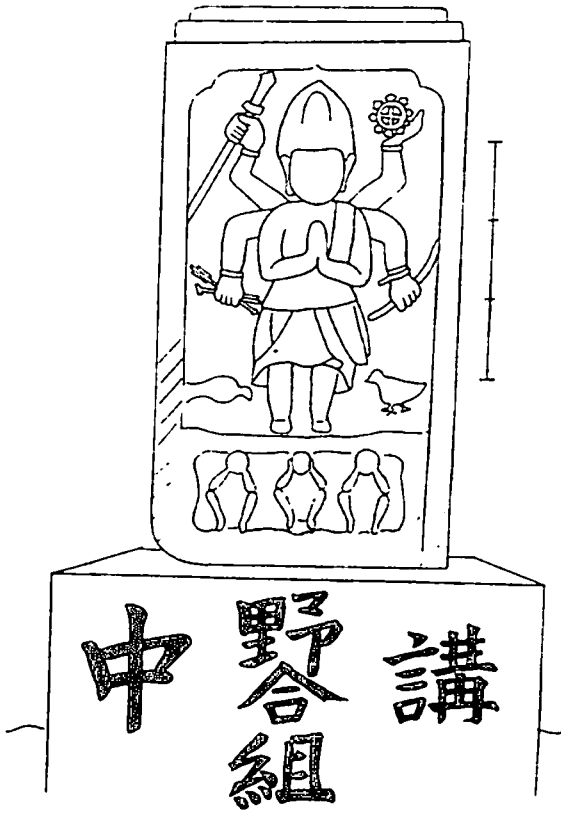
22．文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　頭部山状角型（北西向き・高さは中）
年　号　安永八年（一七七九）
［左側面］
安永八己亥歳

［正面］
（日月）青面金剛（二鶏）（三猿）
［台　石］
竹内喜六
□
桃木兵右ヱ門
本間兵□
関根久右ヱ門
鈴木半□（兵衛か）
細沼□右ヱ門
川上政□右ヱ門
栗原市右ヱ門
同文次
同仁兵衛
長嶋弥七
同安右ヱ門
同藤右ヱ門
同長□□（兵衛か）
栗原弥三郎
同平七
石井源八
同久右ヱ門
本間滑□（兵か）衛
長嶋□右ヱ門
□藤六右ヱ門
竹内喜八
□
□弥兵衛
□
□金次
□
［右側面］
十一月吉祥日

23．六地蔵塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　頭部山状角柱型（北西向き・高さは中）
年　号　不詳
［左側面］
（天蓋を持つ地蔵立像）
（宝珠を持つ地蔵立像）
［正面］
（宝珠と錫杖を持つ地蔵立像）
（合掌している地蔵立像）
［右側面］
（幡を持つ地蔵立像）
（数珠を持つ地蔵立像）

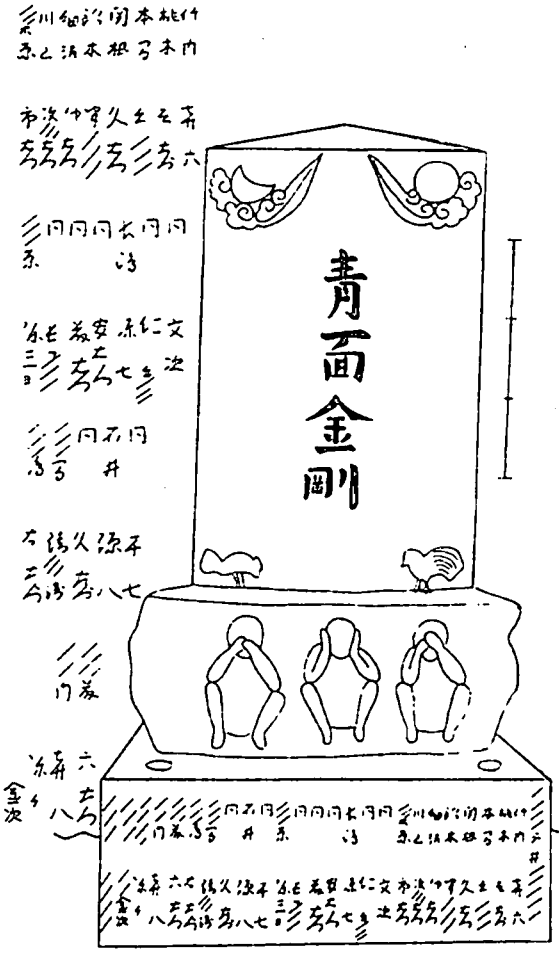
24．『第六天』文字塔
所在地　荻島・野合自治会館
石塔型式　角型（北西向き・高さは低）
年　号　享保三年（一七一八）
［左側面］
享保三戊天九月吉日
［正面］
第十八天神
惣施主中諸願成就

21・荻島 青面金剛像庚申塔



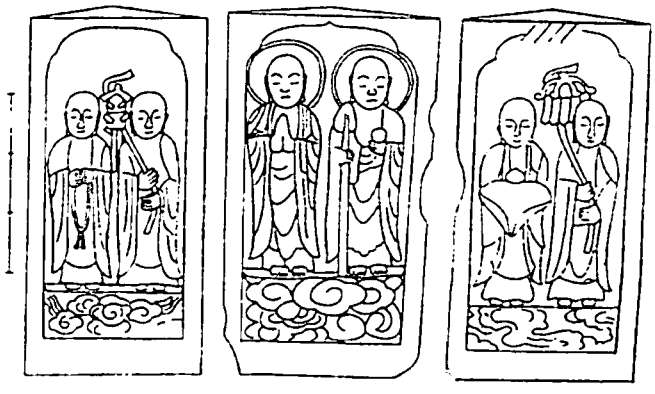
野合自治会館

22・荻島 文字庚申塔



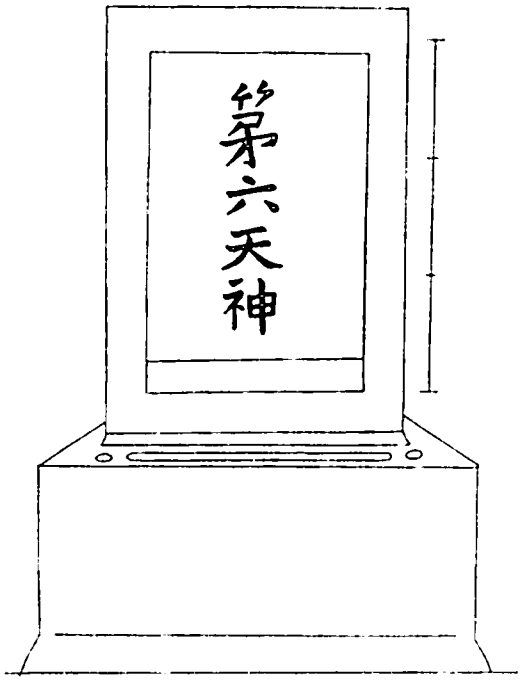
野合自治会館

23・荻島 六地蔵塔



野合自治会館

24・荻島 『第六天』文字塔



野合自治会館

旧大房村の石仏

（1）元荒川土手そばの路傍

1．道標付き文字庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一七四番）
所　在　地　大房・北越谷五丁目元荒川土手そばの路傍
石塔型式　頭部山状角型（東向き・高さは中）
年　　号　寛政三年（一七九一）

［左側面］　［台石］

寛政三辛亥五月吉日
新方領　大房村

［正面］

青面金剛（三猿）

會田定右エ門
瀬尾藤右エ門
平林弥五兵衛
中村五左衛門
黒田平　蔵
鈴木平右エ門
同　久兵衛
澤田伴　司
黒田弁　蔵
同　平　八
同　治右エ門
同　金右エ門

［右側面］

左　じおんじ　道
のじ　まる

黒田弥兵衛
同　忠右エ門
同　幸右エ門
同　吉右エ門
藤井清右エ門
萩野六右エ門
平林源左エ門

2．光明真言曼陀羅付き塞塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所　在　地　大房・北越谷五丁目元荒川土手そばの路傍
石塔型式　駒型（東向き・高さは中）
年　　号　享保十年（一七二五）

［正面］

（光明　享保十巳年
真言　法□円心不生位
曼陀羅）　九月廿八日

※1の道標付き文字庚申塔の前に表面を上にして敷石となっていたものを平成十年七月初旬にもう一つの敷石となっていた塞塔とともに立てられたものである。

（2）大房稲荷神社

大房村の鎮守である。

3．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』猿田彦・一三番）
所　在　地　大房・稲荷神社
石塔型式　頭部山状角柱型（南向き・高さは中）
年　　号　天保十五年（一八四四）

［左側面］

天保十五季
甲辰秋九月吉□

※「季」＝「年」

［正面］

猨田彦大神

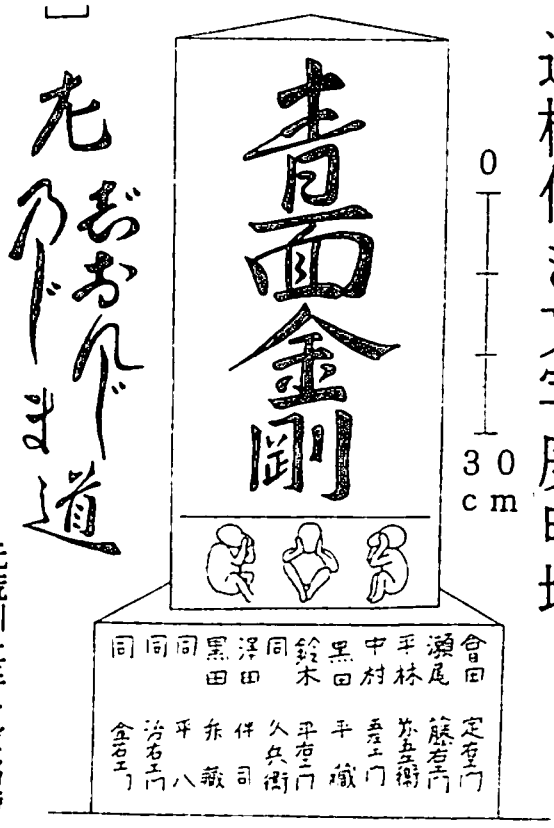
［右側面］

岐大神

※左側面の一部が割れて欠け落ちている。
※猿田彦は、天孫ニニギノミコトが高天原（たかまがはら）から高千穂（たかちほ）に降臨する時、天界からの分かれ道アマノヤチマタ（数多くの道が分かれていた）にいて出迎え、天孫を道案内したという神。岐神（くなどのかみ、ふなどのかみ）は、イザナギの神が黄泉国（よみのくに）からの逃避の後、禊（みそぎ）祓（はらい）の時に投げ捨てた杖から生まれた神で、道の分かれる所に立っていて、種々の災いを退ける神である。
天孫を迎えるために天界からの分かれ道で待っていた猿田彦と道の分かれる所に立っていて様々な災いを退ける岐神の両者が同一視されたのであろう。
神道では、庚申信仰の主尊を猿田彦であるとしている。

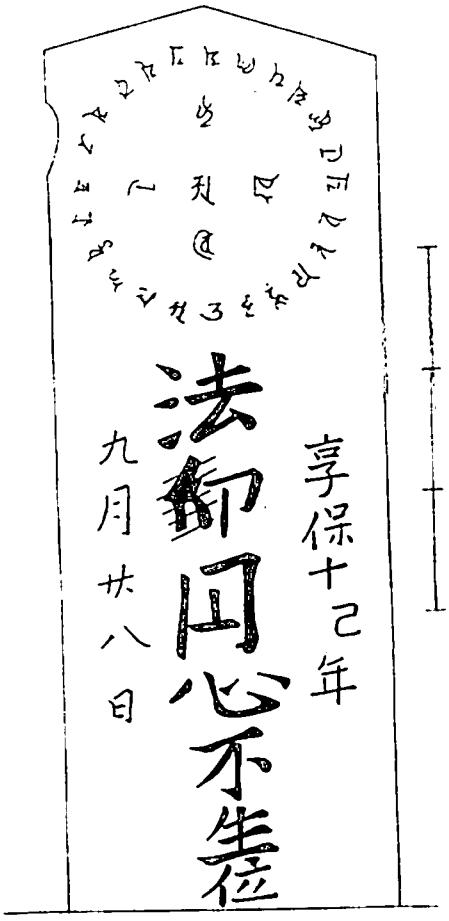
4．樽宮（たるみや）文字塔（『越谷市金石資料集』その他・七番）
所　在　地　大房・稲荷神社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　　号　嘉永六年（一八五三）

1・大房 道標付き文字庚申塔



元荒川土手そば路傍

2・大房 光明真言曼陀羅付き墓塔

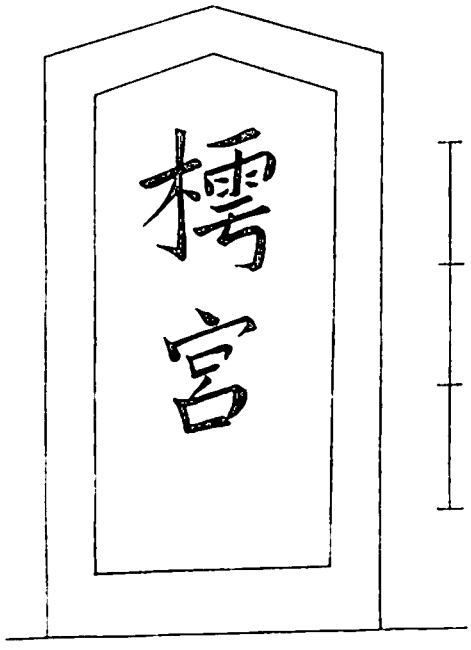


元荒川土手そば路傍

3・大房 猿田彦文字庚申塔

大房稲荷神社

4・大房 樗宮（おうちのみや）文字塔



大房稲荷神社

[正面]
樗　宮
[右側面]
嘉永六癸丑歳十一月吉辰建之
当町　會田氏

※樗宮（おうちのみや）とは、鳥取市にある樗谿（おうちだに）神社をさすと思われる。遠方の因幡国より会田氏によって樗谿神社の信仰がこの地にもたらせたのであろう。

5．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』猿田彦五番）
所在地　大房・稲荷神社
石塔型式　頭部山状角柱型（西向き・高さは中）
年　号　文政八年（一八二五）
[左側面]
文政八乙酉年
十一月吉日
[台石]
[正面]
猿田彦大神
黒田□左衛門
同□
同□門
同□郎
同□門
同□兵衛
同□
□□門
黒田□
同□
[右側面]
天下泰平村内安全

6．寄面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』庚申塔一九番）
所在地　大房・稲荷神社
石塔型式　舟型様駒型（西向き・高さは中）
年　号　元禄六年（一六九三）
[正面]
奉造立庚申講供養現当□攸
□
（日月）（寄面金剛像）（二鶏）（鬼）（三猿）
元禄六癸酉天九月吉祥日　施主敬白
黒田□
會田孫四郎
瀬尾藤右門
八木橋彦四郎
鈴木伝兵衛
中嶋新兵衛
遠藤孫兵衛
會田兵右門
平林重右門
山崎四郎兵衛
中嶋四兵衛
内田吉右衛門
遠藤伝左□
□井□兵衛
□田市左衛門
□
松井□右門

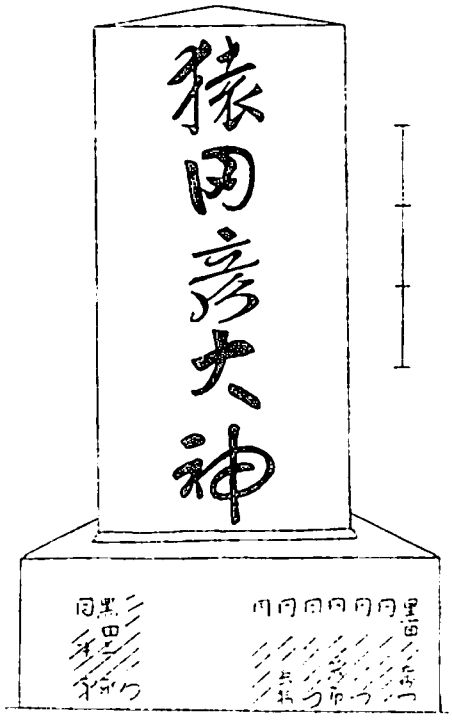
7．寄面金剛像庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　大房・稲荷神社
石塔型式　駒型（西向き・高さは中）
年　号　天保十二年（一八四一）
[左側面]
天保十二辛丑年十一月吉日
[台石]
（損傷が激しく解読不能）
[正面]
（日月）（寄面金剛像）（不明）（三猿）
[右側面]
天下泰平国□□□（土）

8．猿田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』猿田彦一四番）
所在地　大房・稲荷神社
石塔型式　頭部山状角型（西向き・高さは中）
年　号　天保十五年（一八四四）造立、明治三十二年（一八九九）改刻
[左側面]
天保十五季甲辰秋九月吉日
□新調修繕
明治三拾二年十一月吉日
奇附人　世　小嶋弥平治
東武鉄道講負人　話　川俣榮太郎
遠藤君蔵配下一同人　菅谷豊　作
羽生久太郎

5・大房

猿田彦文字庚申塔

大房稲荷神社



6・大房

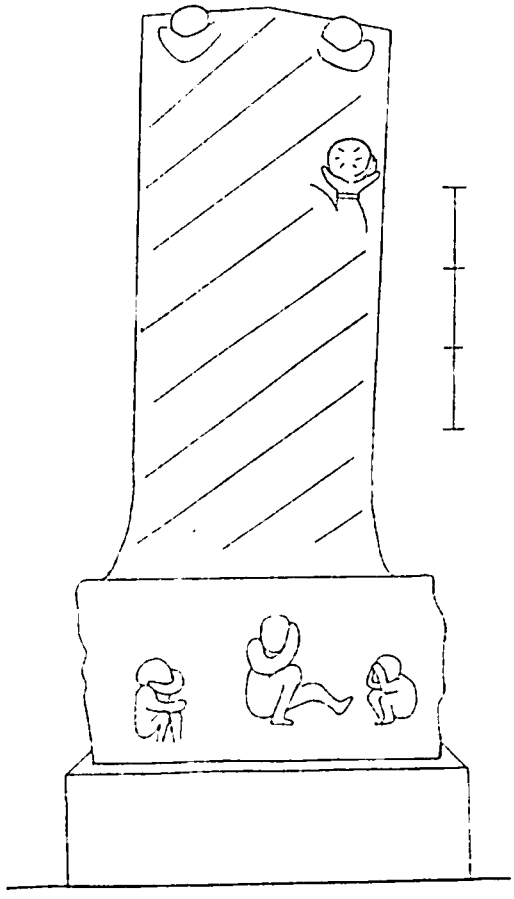
青面金剛像庚申塔

大房稲荷神社

7・大房

青面金剛像庚申塔

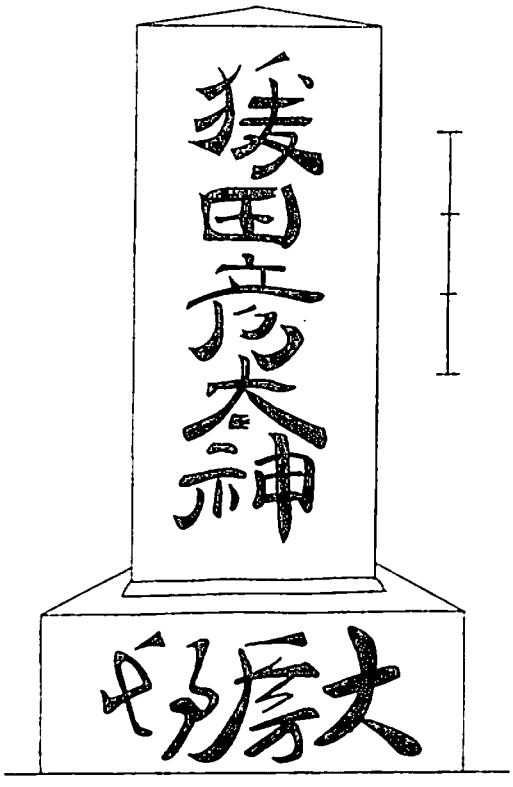
大房稲荷神社



8・大房

猿田彦文字庚申塔

大房稲荷神社



〔正面〕

猨田彦大神

〔右側面〕

岐太神

大房邨

※この石塔は、もともと天保十五年造立であるが、その後、明治三十二年に東武鉄道鐵設請負人の遠藤君蔵配下の人々が新調修繕したのである。左側面にそのことが改刻されている。

※この石塔の向かって左隣には二十一仏板碑、左隣にある祠のさらに隣には弁財天の石祠（『越谷市金石資料集』の弁財天一番）、その隣に不明の石祠が二基ある。どれも正面は破損が激しく不明である。弁財天の祠は、左側面には「辨財天女　千手院宥□」、右側面には「正徳四甲午天、九月大吉良日」とある。また不明の祠の一つは、左側面は「文政十三寅年九月吉日」、もう一つは、左側面は「奉造立水神　御社如意祈攸」、右側面は「元禄九丙子天三月十三日　別当　千手院　願主　黒田勘右門」と刻まれている。

（3）浄光寺

浄光寺はかつては古梅園で有名な寺院であった。すなわち、浄光寺を中心とした地域に明治三十五年に「越ケ谷古梅園」が開園され、毎年大変な賑わいをみせた。害虫の発生が多く見られてくると、大正七年からは浄光寺が古梅園の管理を行ったのである。境内には、大正七年二月に建立した高さ約二〇〇センチ（台石を含む）の自然石の記念碑がある。表面には『古梅園記念』と刻まれ、裏面には『明治三十五年三月　開園』と刻まれている。

また浄光寺は、足立区にある西新井大師を一番とする新四国八十八ケ所の札所三〇番霊場である。明治十七年頃からは、「三郡送り大師」と呼ばれた。

9．光明真言曼陀羅付き墓塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　大房・浄光寺墓地（参道そば）

石塔型式　駒型（北西向き・高さは中）

年　号　享保六年（一七二一）

〔正面〕

念心清信士　逆修　施主

（光明真言曼陀羅）

妙念清信女　霊位　敬白

享保六辛丑天十一月十三日

10．大房薬師堂の宝篋印塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地　大房・浄光寺境内（南東端）

石塔型式　宝篋印塔（北向き・高さは超高）

年　号　享保十六年（一七三一）

〔裏面〕

享保十六辛亥天

法印深宥

（梵字アク）

奉造立宝篋印塔一揆

十月吉良日

〔左側面〕

宝篋印陀羅尼経曰
若有有情能於此塔
一香一華礼拝供養
八十億劫生死重罪
一時消滅生免災殃
死生佛家矣

〔正面〕

（梵字ウン）

経文曰復有衆生重
罪報故百病集身苦
痛遇心誦此神咒二
十一遍百病萬悩一
時消滅壽命延長
福徳無盡矣

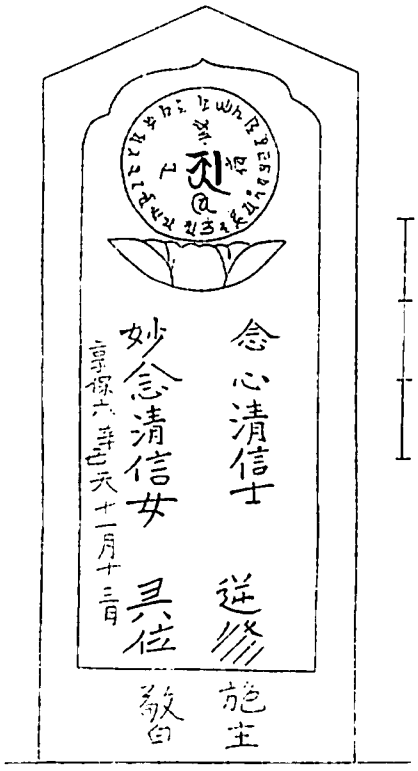
〔右側面〕

（梵字タラーク）

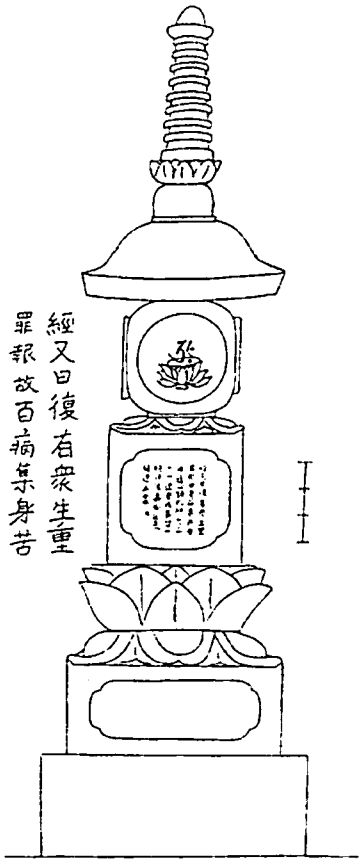
経又曰有衆人或見
塔形或聞鐘聲或其
名或當其影罪障悉
滅所求如意現世安
穏後生極楽
一切諸願充以満足

（梵字キリーク）

9・大房 光明真言曼陀羅付き墓塔 浄光寺



10・大房 大房薬師堂の宝篋印塔 浄光寺



※埼玉鴨場（越谷市大林）そばの大房の薬師堂（現在この敷地に足利市にある宝性寺の別院が建てられている）にあった石塔が、平成二年に薬師堂の廃止とともに浄光寺に移されたのである。大房薬師堂は徳川幕府より浄光寺に堂領として与えられた高五石の御朱印地で、かつては「鵜の森の薬師」と称された大同二年（八〇七）創建と伝えられる由緒ある堂であった。龍華山大林寺の前住職である森道麟（故人）氏の作成した冊子（瓦版）『竜花』（りゅうげ）によると、大林村と大房村とがこの薬師堂の所有を目指して相撲で争い、勝った大房村が手に入れたという伝説があるという。

※また、この石塔の向かって右側（西側）隣には、同じく大房の薬師堂にあった五体の青銅の五智如来像、つまり向かって右側から紹介すると、釈迦如来（本来は不空成就如来）、阿弥陀如来、大日如来、薬師如来（本来は宝生如来）、阿閦如来があり、越谷市指定有形文化財となっている。かつては花祭りの四月八日（後に月遅れの新暦五月八日）の縁日には眼病や安産祈願のため遠方からも信者が参拝したという。

11・狼田彦文字庚申塔（『越谷市金石資料集』狼田彦八番）

所　在　地　大房・浄光寺境内（南東端）

石塔型式　頭部山状角柱型（北向き・高さは中）

年　　号　天保二年（一八三一）

［左側面］

天保二辛卯年

九月吉日

［正面］

狼田彦大神

［台　石］

木村祢左衛門

□源兵衛

□門

□門

□五郎

□門

□

□

□伊之助

［右側面］

岐　太　神

※もとは日光道中（奥州道中）沿いの今はなき大房薬師堂（現、宝性寺別院）へ通じる通路の入口の南側角地にあった。

一歴史の旅まつぶし一（町史編さんだより）第七号（松伏町教育委員会発行）

町史研究

このコーナーは、松伏町史を執筆する編集委員・専門調査員・事務局などが町史の中間報告をします。

「かつて松伏町は桃源郷であった」

町史編さん事務局　倉持孝弘

かつて松伏町は桃源郷であった（図1）。といっても、理想郷という意味ではない。桃の花が咲き乱れる大生産地という意味である。現在では、山梨県一宮町が有名で、よくテレビ等で報道されている。四月頃、中央自動車道笹子トンネルを抜けると、一面桃色の世界が人々を魅了している。このような光景が、松伏町でもかつては見られた。現状を知る町民のみなさんは、そう聞いてもピンとこない人が多いだろう。わずかに、地元生まれの五十歳代以上の人が、衰退した最後の様子を知るのみである。

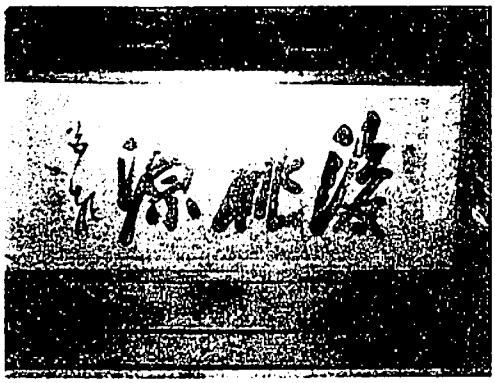


図1「後桃源」（石川民部家旧蔵）

文人墨客が愛でた　　では、かつての桃の様子は当時の様子　　どうだったのか。それを知る史料がいくつか残されている。まず、最初に、津田敬順の『遊歴雑記』を見てみよう。津田敬順は、江戸在住の僧侶で江戸近郊の名所や由緒ある神社仏閣を、文化元年（一八〇四）～文政十二年（一八二九）に足しげく遊歴した。その時の様子をまとめたものが『遊歴雑記』である。松伏町域も築比地を遊歴している。それでは、それを現代文に直して紹介する。「ついひち（築比地）という所は、縦横一里余り（4km四方）の間、見渡す限り野も畑も一面桃林である。二月（現在の三月）の中ごろ花盛りの頃が最も良い。また、五月（現在の六月）半ば頃は、桃樹の葉をことごとく取り去り、桃の実をよく天日にさらして早く赤らまし、六月の江戸伝馬町牛頭天王祭礼の時に商う桃は、みなこのついひち（築比地）より出荷したものである。（中略）その後、文化六年仲春（二月）下旬、再び桃花の咲きそろっている風情を眺めたが、花はすべて形が大きくまさに桃色といえるものである。数千万株一同に満花して、目の及ぶ所桃花でないところはない。」（初編中巻「葛飾郡弐十五里村の桃園」）と津田敬順は絶賛している。津田はここがよほど気に入ったらしく、『遊歴雑記』中で分かる来訪回数は三回、その他、他所の花を紹介する際に築比地の桃と比較している箇所が数ヶ所ある。次に、『徳川実記』の編さんで知られる成島司直は、文化十一年（一八一四）二月末に越谷の旧家を訪れて、越谷の桃花の見事さに感動するが、その際、案内のものから「ここは桃林の序の口で、このあたりより築比地の長良山までの間は、すべて桃の林が絶え間なく続いていると聞かされると、その桃林の多いのに驚いた」とある。その他、幕末の漢学者大沼沈山は、越谷から築比地に遊んだが、桃花の見事さを賞し漢詩を残している。明治の随筆家の大町桂月は、紀行文「春の郊外」の中で明治三十九年（一九〇六）に江戸川の船上から築比地を見て「対岸一面の桃花は八村の中の築比地なり」と記している。庶民にも桃花鑑賞が流行し、「東武鉄道は、東京方面から（越谷近辺）の桃林への見物客のためにも割引切符を発売した。」（明治四十五年三月三十一日

図2「筑比地林春景図」（個人蔵）

図3「赤岩渡図」（個人蔵）

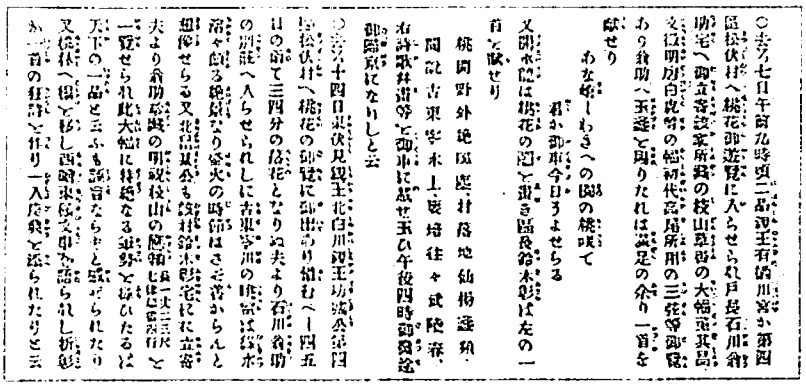


図4　埼玉新報第18・20号（埼玉県立文書館蔵）

図5　模絵（石川民部家旧蔵）

埼玉新聞）とある。視覚的に当時の状況が分かる史料もある。図2・3は、司馬江漢（しばこうかん）が文化八年（一八一一）に岩槻に遊んだ際、築比地及び上赤岩の桃の風景を描いたものである。築比地の場所は分からないが、赤岩渡は現在のふれあい橋の北側あたりである。司馬江漢は、江戸後期の画家で西洋風の画法を取り入れたことで有名である。次に、明治十一年（一八七八）四月七日に有栖川宮（ありすがわのみや）、四月十四日東伏見宮・北白川宮などの皇族が松伏村戸長（明治初期の職制で現在の村長）石川民部家を訪れ、桃花遊覧をしている。有栖川宮と言えば、皇女和宮の元婚約者で、王政復古により新政府の最高職である総裁になり、戊辰戦争では東征大総督を歴任した当時の最高権力者である。その時の様子は、図4の新聞記事や「武州松伏郷石川氏松樹画図記」（町有石川民部家文書No.1085）に詳しい。この記事にある関永龍が描いた絵が図5である。中央にある家が石川民部家でその回りに桃林が描かれている。以上のようにさまざまな文人墨客が松伏町域を訪れている。

表1　桃の分布状況

史料名	松伏町域	越谷市域	庄和町域	野田市域
武蔵国郡村誌	築比地・松伏・上赤岩下赤岩	大林・向畑・大杉・袋山・小林		
迅速測図（上記と重複分は除く）		大松・北川崎・増林	中野・西金野井	谷津・五木・清水・堤台・中野台・岩名
その他	大川戸（町有諸家文書No.31-1）	大沢（「大沢町古馬筥）」		

さて、この桃はいつ頃から植えられたのであろうか。寛政十二年（一八〇〇）の「上赤岩村明細書上帳」（飯島家文書No.243）に、「近年上赤岩村の砂地場へ桃を移植した」とある。また、上赤岩村の古利根川をはさんだ反対側の増林村では、榎本家文書「家譜略」によると、「天明年間（一七八一～八九）に桃を植え付けた」（越谷市史通史上巻P724）とある。これらと先述の通り、文化文政期（一八〇四～一八三〇）に最盛期を迎えることをあわせて考えると、天明期からおそくとも寛政十一年、すなわち、一七八一～一七九九年には植えられたものと考えられる。

桃が植えられた時期

桃の分布状況

桃が植えられた場所が分かる史料は、先述の『遊歴雑記』

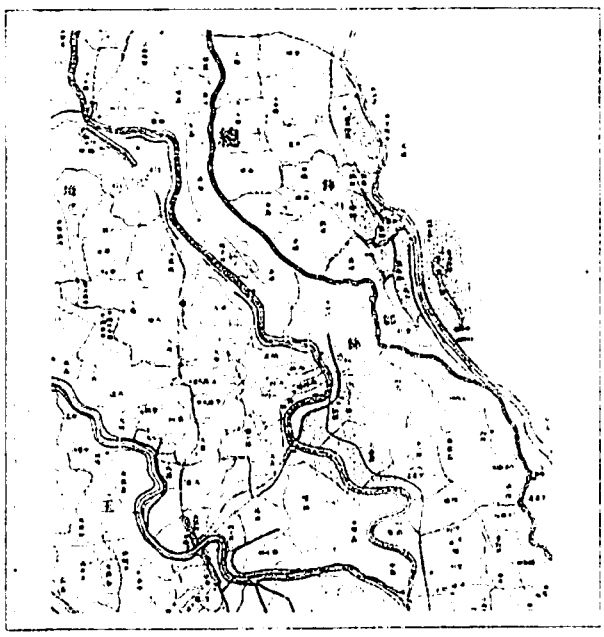


図6　分布地図（『埼玉県市町村合併史』より作成）

に「桃実の最上は武州埼玉郡大林村（現在の越谷梅園附近）、さてはついひじ村である」（二編中巻「四ツ谷桃園煎茶の佳興」）とある。その他に、明治八年調査の『武蔵国郡村誌』（以下『郡村誌』）、明治十三年以降調査の「迅速測図」（歴史の旅まつぶし第六号参照）、越谷市史、その他の古文書類で分かる。これらをまとめると表1になり、地図に落としたものが図6になる。河川沿いに集中しているのが分かる。これは桃が排水の良い土壌でよく育つことを考えると、先述の飯島家文書に、「砂地場へ桃を移植した」とあるように、古利根川や元荒川沿いの自然堤防上で砂交じりの所や、築比地のような高台で水はけの良い所が桃の栽培に適していたためであろう。

桃の品種

では、江戸時代の桃はどのような品種であったか。それがわかる史料は残念ながら現段階では発見されていない。しかし、現在の蜜入り桃のような甘い桃でなかったことだけは百科辞典などから分かる。「日本大百科事典」（小学館）によると、「果実が小さく、甘味に乏しく、果肉は堅く、かつ果汁が少ないものが多かった。明治初年に外国産、特に中国産が導入され日本の栽培品種の向上に大きく貢献した。（中略）多汁で甘く、肉質は柔らかく、大果であるため日本で育成された主要品種は多少ともこれの血を受けたものが多い」とある。では、昭和期はどうであったか。聞き取り調査によって明らかになった品種は、テンシンモモ、ニホンモモ、ヒクラワセ、クラカタワセ、オオクボ、キントキなどが栽培されていた。堅くてすっぱい桃が多かったそうである。

明治期以降になると、桃以外に、スモモ（巴旦杏《通称バタンキュウ》）、ビワ（おもに築比地地区）、ナシ（おもに田中地区）などが多く栽培されるようになった。スモモは、昭和六年に金杉村青年団によって作られた「郷土いろは歌留多」の「メ」で、「名物牡丹杏、四万余箱」、「セ」で、浅間様には枇杷・李」と紹介されるほど多く栽培された。

桃の分布状況

桃の分布状況で、桃の栽培地が分かったが、それぞれの出荷量はどのくらいであったか。『郡村誌』の各村の物産の項に、明治八年当時の桃の出荷量が記載されている。それをまとめたのが表2である。ご覧の通り単位がバラバラである。これでは単純に比較できないため、『遊歴雑記』に桃の大生産地と紹介された築比地村と大林村が使用する「箱」と「籠」だけをとり上げてみる。上赤岩村と下赤岩村を基準に考えてみると、当時両村の畑の反別（面積）差は、下赤岩村より上赤岩村のほうが若干多い。それに対して、出荷量の数量は二倍になっていることを考えると、箱と籠のサイズは箱の方が多少多く入るか、ほぼ同じサイズと乱暴ではあるが推測できる。これにより、築比地村は、圧倒的に出荷量が多いことが分かる。また、『郡村誌』以外で、大正から昭和初期の状況が分かる史料がある。先述の「郷土いろは歌留多」で、「名物牡丹杏、四万余箱」、「金杉小学校の100年」の昭和五年の項では「一日千箱、総出荷四万箱」とある。

表2　郡村誌における出荷量

村名	築比地村	松伏村	上赤岩村	下赤岩村	大林村	向畑村	大杉村	袋山村	小林村
出荷量	9940箱	1049籠	500籠	251箱	2720箱	22石	231貫	2840籠	53駄

（『武蔵国郡村誌』より作成）

栽培と出荷

桃の栽培は大変だったらしく、「遊歴雑記」（五編下巻「越谷塩吉が振舞」）によると、「五月下旬、土地の男女一同樹にハシゴをかけ、高い樹には足場を組んで葉を取り捨て、天日にさらして赤くする。なかなか人手がかかって梅の実とは大いに違う」とある。また、聞き取り調査によると「桃に袋をかけたり（図7）、肥料や防虫などの手間が大変だった」という声が多かった。

出荷は、「金杉小学校の100年」に、明治末頃から昭和初期にかけて、築比地地区の出荷方法が詳しく説明されているのでそれを

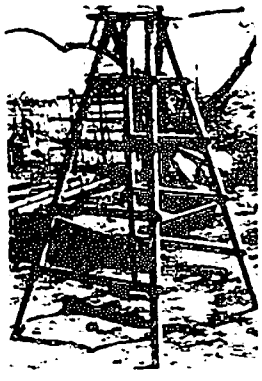


図7　桃に袋をかけるための脚立

引用する。「箱の中につめる時、下に麦わらを敷いて、上に屋号をつけ、部落ごとに集荷し、集荷場から荷車で船着場まで運びます。三時頃になると舟でとりに来て、東京の小名木川まで行き、そこからハシケを使って、市場に持って行きました。市場は神田、京橋、後になって築地に納めるようになりました。仕切り（送り状）をまとめて、家ごとに集め、それを持って上乗りさん（代表の人1・2人）が行きました。仕切りの裏に金額が書かれ、舟は二人乗りで交代で当番にあたりました。長次船や治助船に乗って行き、帰りは電車で帰ってきました。昭和に入ると、その運送はトラックになりました。出荷は、毎年六月二十日から東京のお盆が終わるまでの間でした。」とある。桃の出荷は、築地地区にとって重大な関心事であった。そのため、大正十二・三年頃までは、この出荷作業を終えると、農家の人々は「桃山講」を開催していた。桃山講とは、県立浦和第一女子高等学校郷土研究部が昭和四十八年に調査した「松伏町総合調査資料報告」によると、「リヤカーで河岸に集荷し終わってから、組の人が河岸に集まり酒宴を開く。仕切り帳を持って、（中略）上乗りさんが東京に行ってお金に換えてもらう。それから、勘定をして酒宴を終わる。」とある。桃を積んだ船は、明治二十四年の水神社（桃山中碑）（図8・八ページ地図）の銘文によると、今上（野田市）、二ノ江（江戸川区）、小松川（江戸川区）船堀（江戸川区）、港町（港区）などの河岸場を経由し、江戸川を下り神田市場（千代田区）、京橋市場（中央区）、浜町市場（中央区）、本芝市場（港区）などに出荷するのだが、当時の河川は重要な交通手段であり、船が盛んに往来していたため、船の事故も当然多かった。そのため、桃山講の人々は無事に出荷できることを願って先の水神社（桃山中碑）を建立した。このように、出荷が無事終了すると村をあげて直会（懇親会）を行なったのである。

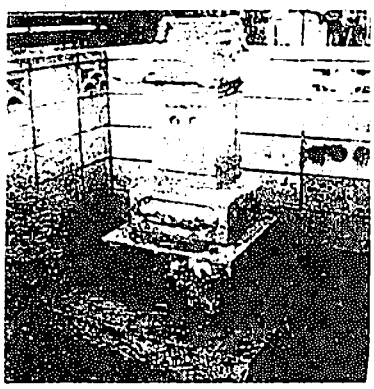


図8　水神社（桃山中碑）

衰退

大生産地であった松伏町域の果実類（桃を含む）は、表3の旧金杉村（築地・金杉・魚沼）の例によると大正末期から昭和初期が最盛期であった事が分かる。その後、昭和九年からイモ類や加工農、昭和十二年に青物野菜が栽培され始め、ちょうどその頃から桃の出荷量が減少し、衰退の道を歩むようになる。その原因は、聞き取り調査によっていろいろあった事が分かる。表3からも分かる通り、戦時色が強くなった昭和十年代ごろから、食料増産などにより、桃から野菜へと生産物が変えられていったことによる時代背景。築地地

表3　金杉村の概要

年	米生産額	麦	果物	蔬菜(青物)	イモ	その他
大正8年	74,836	14,881				
9年	135,673	31,946	7,800			
10年	135,760	31,946	9,800			
11年	98,344	21,244	10,200			
12年	98,344	21,224	4,537			
13年	109,746	22,905	5,117			
14年	165,692	19,142	12,828			
15年	92,950	24,546	12,828			
昭和2年	94,400	20,080	10,781			
3年	123,502	20,800	11,067			
4年	123,502	20,800	11,067			
5年	87,560	15,908	4,925			
6年	72,250	14,000	14,000			
7年	72,250	14,000	14,000			
8年	72,250	14,000	14,000			
9年	94,790	23,451	12,377		3,036	5,500加工農
10年	94,794	23,451	12,371		3,026	5,500加工農
11年	94,790	23,451	12,377		3,036	5,500加工農
12年	122,560	28,210		17,363	3,650	4,500加工農
13年	134,672	27,100	4,538	5,532	2,834	4,349タバコ
14年	134,672	27,100	4,538	3,749		4,349タバコ 4,538加工農
15年	134,672	27,100	4,538	3,479		5,000加工農
16年	不明	不明	5,000	4,000		5,000加工農
17年	4,434石	2,706石	5,000	4,000		5,000加工農
18年	3,101石	2,706石	5,000			5,000加工農
19年	9,101石	2,706石	5,000			5,000加工農
20年	9,101石	2,706石	5,000			5,000加工農

（『金杉小学校の100年』p71）

区では、明治期から昭和三十年代にかけて江戸川河川改修が数回行なわれた。築比地地区の東側にあった桃畑は河川敷となり、住人の移転先も桃畑などを潰したことによる耕地面積の減少。また、町内全地区から聞かれたこととして、害虫により枯れたり、実が大きくならなくなったりしたことなどの害虫被害。松伏地区では昭和三十年代に新種が出て人気がなくなり、売れなくなってやめたという不人気による需要減。栽培が大変なのでやめたという生産者側の都合など、理由はさまざまであった。そして、表4の通り年々減少し、昭和三十八年には三十反になった。役場の敷地面積が約六反七畝であることを比較して分かる通り、町内全域での桃畑の占める面積は非常に少なくなった。そして、昭和四十九年にはまったく消え失せてしまったのである。

表4　松伏町域の桃の面積と収穫量

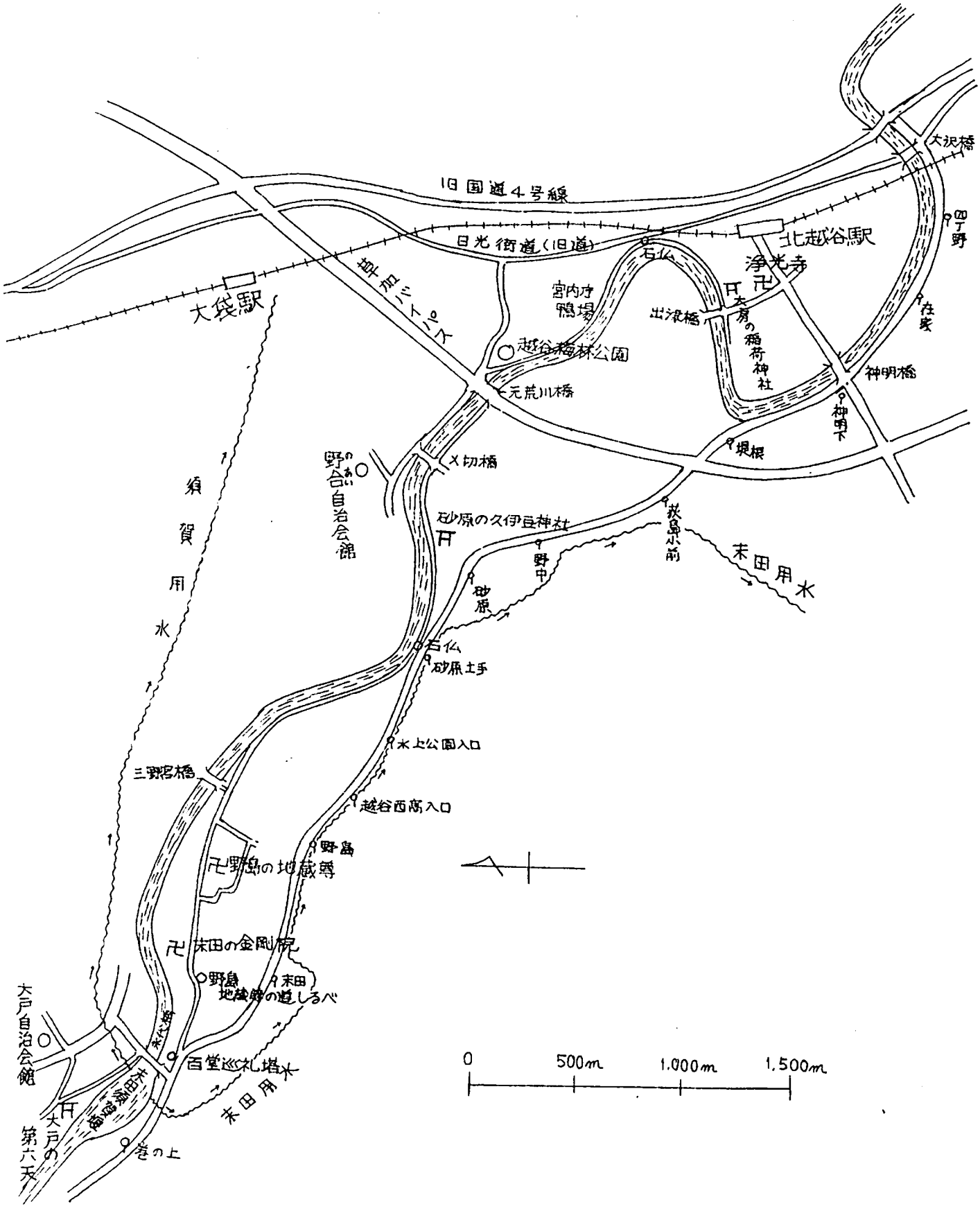
年代	村名	結果樹面積	収穫量	備考
昭和33年	松伏村	41反	34,850kg	ha表示に変更
	金杉村	22反	18,070kg	
	計	63反	52,920kg	
34年	松伏村	46反	33,476kg	
	金杉村	22反	15,444kg	
	計	68反	48,920kg	
35年	松伏村	70反	56 t	
	金杉村	30反	23.1 t	
	計	100反	79.1 t	
36年	松伏村	70反	55 t	
	金杉村	30反	22.6 t	
	計	100反	77.6 t	
37年	松伏村	45反	36.2 t	
	金杉村	25反	19 t	
	計	70反	55.2 t	
38年		30反	23 t	
39年		3ha（30反）	37 t	ha表示に変更
40年		3ha	29 t	
41年		3ha	35 t	
42年		3ha	38 t	
43年		3ha	40 t	
44年		3ha	29 t	
45年		資料なし		
46年		資料なし		
47年		1ha	11 t	
48年		1ha	10 t	
49年		—	—	

（関東農政局所蔵資料より作成）

桃が栽培された背景

さて、このように消滅してしまった桃ではあるが、そもそもなぜこの松伏町域に桃が栽培されるようになったか。桃は、天明期から寛政十一年（一七八一～一七九九）にかけて植えられ始めたと先に述べた。まず、この頃の時代背景を考察してみる必要があろう。天明期から寛政期と言えば「天明の大飢饉」があげられる。すなわち、天明三年（一七八三）の浅間山の噴火による降灰により、古利根川を始めとする関東各河川の川床の上昇によって、少量の降雨でも氾濫しやすくなり、水害が多くなった。また、噴煙による異常気象などで、不作が続いたことにより、天明から寛政期に飢饉が数回起こった。松伏町域でも「天明の大飢饉」では大打撃を受けた。その状況は、惨憺たるもので、「大昔から経験したことも無い大飢饉につき、村では食料がまったく無い」（築比地・今井家文書No.29）や「ふすま（小麦のひき糟）、酒糟、タニシ、その他摘み草などを食べた」（上赤岩・飯島家文書No.254）とあり非常に困窮した様子が窺える。このような状況の中でも、支配者からの年貢取り立ては必ずある。やむを得ず、質入れや年貢減免願（大川戸・坂巻寿男家文書No.47）、代官から金・米・種を利子つきで借りて（坂巻寿男家文書No.59・70・79）急場をしのいだ。このため、それを返済するために水害に強い商品作物の栽培が望まれた。支配者側としても、百姓の困窮は年貢減少をもたらすため、「村方の困窮の立ち直りとして、果樹木を植えるよう命令」（杉戸町教育委員会蔵　秋山家文書　寛政六年七月「果樹木書上帳」）したのである。そこで、先述の自然堤防や台地上の地質条件に合った桃を栽培するようになった。そして、日もちしない桃を、大消費地である江戸へ船で一日で出荷できる距離にある地理的条件にも恵まれたため、他を圧倒した生産量をほこったのである。

現在では、ほとんど見られなくなった桃は、十八世紀後半に飢饉対策として栽培され始めたが、「一里四方の間桃樹のみを植え込み、屋敷も耕地は勿論目のおよぶ所桃樹のみ」（「遊歴雑記」五編下巻「越谷塩吉が振舞」）というあまりにも多量で、かつ、その桃の花があまりにも鮮やかであったため、生産面だけではなく、観光面でも脚光を浴びるようになった。そして、文化文政期以降には、多くの文人墨客に愛されるようになり、ついに、松伏町域は「桃源郷」と呼ばれるようになったのである。


旧国道4号線
日光街道(旧道)
大袋駅
北越谷駅
浄光寺
大沢橋
四丁野
石仏
宮内庁鴨場
出流橋
越谷梅林公園
元荒川橋
神明橋
神明下
堤根
往来
須賀用水
野の合自治会館
メ切橋
砂原の久伊豆神社
荻島小前
末田用水
野中
砂原
石仏
砂原土手
水上公園入口
三野宮橋
越谷西高入口
野島
野島の地蔵尊
末田の金剛院
野島
末田
地蔵尊の道しるべ
大戸自治会館
百堂巡礼塔
末田用水
大戸の第六天
巻の上
0
500m
1,000m
1,500m

越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

越谷市郷土研究会とは　（平成１５年３月現在）

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、また、毎年、越谷市民まつり・
越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和４０年（１９６５）３月に発足しました。
以後地道に活動し、現在は会員数が２９１名程の大所帯となりました。
ほぼ毎月行われる史跡めぐりは３１２回を数えるまでになりました。

◎当会の平成１２年以降の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成１２年１月３０日（日）　講師　元埼玉県立さきたま資料館長大村進氏
「創立３５周年記念講演会」（後援は越谷市教育委員会・文化連盟）

平成１２年９月２日（土）　平成１２年度「歴史講座」を開始（全５回）。

平成１３年８月２６日（日）奥州街道４００年・記念歴史講演会（会友の本間清利氏）

平成１３年９月２４日（月）奥州街道４００年・記念史跡めぐり（蒲生~南越谷）
以後、「南越谷～北越谷」(10月)、「北越谷～せんげん台」(11月)と実施。

平成１４年３月２４日(日)　３００回記念史跡めぐり・力石を諏訪に訪ねる。
長野県の現地の新聞に大々的に取り上げられ、卯之助の力石が紹介される！

平成１４年６月３０日（日）　歴史講演会「平田篤胤と越谷出身の妻おりせ」

平成１４年９月１１日（水）　史跡めぐり「秩父札所めぐり　その一」
以後、秩父札所めぐりその二(10月)、その三(11月)と実施（観光バス使用）

平成１５年１月３日（金）　恒例の七福神めぐり（北千住方面）

平成１５年１月２６日（日）研究発表会「越谷周辺の諸巡礼」（常任理事の高橋力）

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行（Ｂ５版、百十～百五十頁程度）及び無料配布
内容は主に会員による郷土の調査・研究の報告や随想の寄稿文などです。

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付活動なども行ってきました。

郷土研究会にお入りになりますと

◎すべてのイベントの案内が受け取れます。
せっかくよい行事があったのに知らなかった、ということがありません。

◎会員だけのための特別行事に参加できます。
郷土研究会の会員限定イベント、例えばバス史跡めぐり等にも参加できます。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間二千円（４月～翌年３月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。
どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・
電話番号を記入し、下記までお寄せ下さい。
または、当会の各種行事の際に、郷土研究会役員までお申し込み下さい。

〒343-0806 越谷市　宮本町　３－１１７－８　谷岡隆夫方
越谷市郷土研究会
☎０４８－９６２－７５２７